三位一体主日・聖霊降臨後第１主日

箴言８章１－４、２２－３１節
ローマの信徒へ手紙５章１－５節
ヨハネによる福音書１６章１２－１５節

本日は、三位一体主日です。『聖書』の神様が、三位一体であることを、あらためて確認する日です。

この三位一体ですが、これは説明が困難な概念です。また『聖書』の神様が三位一体であることは、旧約は勿論のこと、新約においても明記されていません。「父と子と聖霊」という文言ですら、マタイ福音書の２８章１９節に「**彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け**」とあるぐらいです。本日のヨハネ福音書では、父と子は一体であると何度も強調しますが、聖霊は、本日の箇所で「**しかし、その方、すなわち真理の霊が来ると**」（ヨハネ 16：13）というように、後から来る別の人格であるように記されています。しかし、聖霊は、神様の息ですから、そもそも天地創造の初めから神様と一体です。その意味では、三位一体という概念は、イエス様が天地創造の初めからおられる方であるととらえた、ヨハネ福音書において間接的には示されているといえます。

使徒書は、新しい聖書日課になってもパウロのローマの信徒へ手紙であることに変わりはありませんが、箇所が８章１２―１７節から、５章１－５節に変わりました。Ａ年の大斎節に読まれる箇所でもあります。そのパウロにおいても、三位一体という概念はまだ明確ではありません。しかし、本日の使徒書で、パウロは、「**私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです**」（ロマ 5：5）と述べています。パウロは、イエス様を通して示された主なる神様の愛が、今も聖霊を通して信仰者に注がれているととらえています。その意味ではパウロも間接的に主なる神様を三位一体的にとらえているといえます。

この手紙は、その名の通りパウロがローマの信徒の人々にあてた手紙です。パウロが宣教活動をしていた時代、地中海世界を支配していた帝国の首都ローマにもすでにいくつかの教会がありました。それらはローマに数多く住んでいたユダヤ人と異邦人のキリスト者たちによって成立した、家の教会であったと思われます。それらは、コリントの教会のように、パウロが宣教して設立した教会ではなく、またおそらく訪問もしたこともない教会でした。それ故に、この手紙の内容は、各教会の具体的な問題ではなく、神学的な事柄が中心になっています。

この個所は、３章２１節から８章３９節の信仰義認を主な内容とした部分に含まれます。信仰義認という言葉は、信仰か行為かという単純な二者択一的事柄としてとらえられやすいのですが、パウロが主張しようとしている事柄はそうではありません。イエス様の十字架と復活によって、その愛を示された主なる神様に、どのように応答するかという事柄です。主なる神様がイエス様を通して愛を示されたこと、パウロはそのことを、ユダヤ人・異邦人の区別無く、イエス様を通した信仰によって全ての人間を義とされた、新しく創造されたこととととらえるのですが、パウロはそのように信仰によって義とされた信仰者が、

どのように生き、また行為するのかを課題としているのです。またパウロは、その行為が教会を通して行われることを前提としています。ただし、この箇所で示される事柄は、その行為の具体的な内容ではなく、その行為が何を意味するかということです。

この箇所でまずパウロは、信仰によって義とされた者がどのような状態にあるかを確認します。それは、「**このように、私たちは信仰によって義とされたのだから、私たちの主イエス・キリストによって神との間に平和を得ています**」（5：1）いるという状態です。「神との間に平和」とは、天地創造の初めに本来持っていた平和にほかなりません。ただし、パウロは信じた瞬間にそれを得ていると考えているわけではなく、信仰者は常に「**このキリストのお陰で、今の恵みに信仰によって導き入れられ、神の栄光にあずかる希望を誇りにしています**」（5：2）という状態ととらえます。つまり、最終的な救いに与る希望をもっとも大切なもの（誇り）として生きることが、信仰者において大切だということです。そして、そうであるがゆえに、パウロは、その希望から苦難をも誇りにすることができると考えます（5：3）。そしてそこから有名な言葉が続くのですが、そこは、「**苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生む**」から、新しい訳では「**苦難が忍耐を生み、忍耐が品格を、品格が希望を生む**」と変わりました。「練達」が「品格」になりました。ここにある言葉は、「考える」という意味の動詞と同じ起源の言葉で、「証明、保証、試練（そして、それらを受けた人格）」を意味します。聖書協会共同訳『聖書』では引照欄に直訳「保障」、別訳「練達」と記載されていますが、「品格」という訳は、それを生み出す「行為」ではなく、それを経た「人格」としてこの箇所をとらえたからでしょう。いずれにしてもパウロは、イエス様を通して主なる神様を信じるとき、どのような苦難も希望に変わることを確信しています。何故ならば、すでに触れましたが、「**私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです**」（5：5）ととらえるからです。パウロは、ヨハネ福音書のように聖霊について、イエス様が約束される弁護者・助け手としてはとらえていません。しかし、愛が聖霊によって注がれるととらえています。それは、『聖書（旧約）』に基づいて考えるパウロにとって、主なる神様が働かれるときにそれが霊（聖霊）を通して行われることを大前提としているからでしょう。つまり、パウロにとって、主なる神様とその息・聖霊が一体であることは当然の事柄であったということです。父と子との一体を強調するヨハネ福音書と強調点は異なりますが、パウロも、主なる神様を、三位一体的にとらえているといえるのです。そしてそうであるがゆえに、三位一体的に主なる神様をわたしたちがとらえるならば、パウロと同じように希望は無くならないのです。

わたしたちの世界に今ある苦難は、パウロの時代に比べ、その規模も深さもより重大といえます。その苦難が解決するために努力することが大切です。しかし、解決しようとする人間的思いからくる努力が、さらなる苦難を引き起こすこともあります。だからこそ、教会に集められるわたしたちは、人間の思いを超えて、聖霊を通して主なり神様の愛が働くことを願い求めていきたいと思います。イエス様を通して示される主なる神様の愛は変わらないからです。わたしたちの希望も変わらないのです。その希望を示し続ける教会であり続けたいと思います。